

## 第1回 2025年 大阪・関西万博 政府出展事業検討会議 議事要旨

■日時：2021年10月26日（火）16:00～17:10

■参加者（五十音順）：

池坊 専好氏、古賀 信行氏、コチュ・オヤ氏、佐藤 オオキ氏、塩瀬 隆之氏、千 宗室氏、  
鳥井 信吾氏、米良 はるか氏

■議事要旨

●事務局より、資料4に基づいて、今後の2025年大阪・関西万博日本館の検討について説明した後、日本館への期待や盛り込むべき要素について、有識者から意見を頂戴した。各有識者からの主な意見は以下の通り。

・近年の万博(上海万博とミラノ万博)では、日本館は全く違う内容ながらも、背骨は同じだった。万博は毎回目新しい事をするというより、1つの想いをリレーのように手渡していける場であれば良い。

・万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」は、コロナの発生によって今日的意味が出てきた。生命に関わる先進的分野もあるが、いのちを真ん中に置くのが良い。また、従来の会場での参加だけではなく、オンラインであっても、多くの人が強く関心を持てるような新たな工夫が必要だと考える。万博誘致当初からデジタルを活用した効率的な入場の検討を行っていたが、現実集う事が難しい現状を考えると、オンラインでも参加できると良い。

・Society 5.0 というデジタル化が進んだ社会を見せる場であってほしい。基本構想で書かれた Society 5.0 を通じた SDGs の実現をいかに具体化していくか、追求してほしい。

・万博の一番の目的は、若い世代、特に次世代を担う人に何を伝え、何をレガシーとして残すか、であってほしい。テーマ、コンセプトをより分かりやすく具体的な形にしていくことが大切。

・人の「つくる責任」、「つかう責任」を入れたい。SDGsを企業や大きな施設の責任と理解している人は多いが、1人1人の行動がいかに地球環境に影響を与えるかということ、体験出来たらよいと思う。加えて日本という軸で考えると、日本には「もったいない」という文化があり、国際的に見ても独自の感覚。これを活かしたらよい。

・Society 5.0 のデジタル化は様々なレベルで推進されているが、それによっていのちといのちの距離は広がる可能性がある。リアルなコミュニケーションが減り、人と人の関係性が変わっていくことも、日本らしい視点で表現できると良い。

・今回のコロナ禍では、オンラインで一通りの事はできしまうと気づかされた。改めて、人がわざわざ行く、みんなで集まるという事の価値は何なのかを精査しないと、日本館も万博全体もうまく行かないと思う。

・SDGs に関して学校での講義の機会が増えたが、基本構想に対して一番多い質問が「いのちと、いのちの、あいだに」とはどこの事か、という点。どこをあいだと呼ぶかは具体化していく必要がある。構想にある「畏敬」も、自然を恐れ、且つ敬うという関係性がとても重要だが、定義が定まらないものをきちんと考え、探究することが大切である。

・参加国の日本館コンセプトに対する受け止めも考えなくてはならない。万博出展国にも大きいところ、小さいところがあり、国力にも差がある。そのような国に対する配慮を持つことが必要。

・今回の万博は非常に難しいテーマを掲げている。それをクリエイティブで昇華していくなかで、最終的なアウトプットが多くの方に支持されるには、説明するよりも、早めに巻き込むことが重要。プロセスエコノミーという言葉もあるが、体験や過程に対して共感や自分事化していく。万博を作る過程でも、多くの人たちが自分事化するように設計していくことが重要なのではないか。どうやって人々に関与してもらえるか、自分事化してもらおうかも今回の議論の中で話し合えると良いのではないか。